

『婚約者は俺様御曹司!?!』

著:若月京子

ill:明神 翼

二人は揃ってマンションを出て、駅へと向かう。そして地下鉄に揺られて大学へと辿(たど)り着いた。

歴史を感じる門を潜(くぐ)ると、校舎へと続く道の両側で咲き誇る桜並木に思わず足が止まる。

「桜が綺麗だ……」

「ああ。いかにも入学式って感じだな」

「でも…あの高校の桜には敵わないかな。最初に見たとき、本当にびっくりした。辺り一面が薄ピンクに染まって、幻みたい綺麗光景だった……」

「あれはみんな驚くんだよ。花の季節が過ぎると、毛虫の多さにうんざりするけどな」

「ああ、あれにもびっくりしたよ。大量の毛虫が枝からぶら下がってるのに気がついたとき、思わずギャツって叫んだし。山の中だけあって、いろいろな虫を見たなあ。お坊ちやま高校のくせに、妙に野趣溢れてた気がする……」

「そのわりには、慣れない連中も多かったけどな。よく悲鳴が聞こえてきたぞ」

「ああ、男子校なのに、『ギャツ』っていうやつね。でもあれ、本気で驚くと『ぎゃあ』だったり、『ぐあっ』だったりするんだよね。しかも、結構野太い声で」

「ま、可愛い子ぶってても、男は男だからな」

「そうそう。そのあと、しまったっていう顔をしてるのが笑える」

卒業したのはついこの間…まだ一月しか経っていないのに、すでに懐かしく感じられる。

八尋は傍らに立つ帝人に、にっこり笑って言う。

「大学でもよろしく」

「こちらこそ」

二人は満開の桜に見とれながら桜並木を抜け、受付をすませてから式次第や大学の要綱などをもらい、講堂へと向かう。

新入生とその父兄すべてを講堂に入れるのは無理だから、学部ごとに日をずらして入学式をやるらしい。

これは滅多に来られない地方在住の父兄に、大学の様子を見せたいという大学側の配慮だそうだ。

この日は経済学部と法学部の合同で、それでも講堂の中は充分混雑していた。

混み合っている中から空いている席を見つけ、着席する。

大学の門を潜ってから…いや、潜る前からうるさいほどの視線を感じる。

長身でハンサム、いかにも仕立ての良さそうなスーツを着こなした帝人と、その隣にいる人形のように整った綺麗な顔の八尋は非常に目立っていた。

単独でも十分に人目を引くのに、一緒にいるからなおさらだ。特に帝人は女性たちに熱い視線を向けられ、周りの女性たちは帝人に声をかけたような様子でソワソワしている。

それだけでなく、帝人の姿を見つけた途端、ワラワラと人が集まってきた。
帝人と八尋が進学したのは難関といわれる有名大学だが、同じ高校出身の生徒も多い。山の中でかなり特殊な全寮制高校ではあったが、生徒たちの頭脳レベルは非常に高いのだった。

「お、おはようございます、帝人様」

「ボク、帝人様と同じ学部です。よろしく願います」

「ボクは違う学部なんですけど、帝人様のお姿が拝見したくて潜(もぐ)り込んでしまいました」

「何、それ。ずうずうしい」

「うるさいなー。ほっといて」

「帝人様、スーツ、すごくお似合いです」

「格好いい……」

周りの目を気にせず帝人様、帝人様とはしゃいでいる集団は、講堂の中にあつて恐ろしく目立つ。

帝人と八尋が二人でいるだけでも人目を引いていたのに、今はまさしく注目の的だ。人に見られることに慣れている帝人は平然と彼らの挨(あい)拶(さつ)を受けているが、八尋は隣で辟(へき)易(えき)していた。

帝人と違って見られるのは嫌いだし、特にそこに欲望の熱を込められると鳥肌が立つ。

集団になったことで視線は露骨なものになり、八尋は背筋がゾクゾクとするような悪寒に襲われた。

ただの気のせいならいいのだが、顔や腰、尻のあたりにねっとりとした視線を感じる。相変わらず帝人のファンたちはうるさいし、女性たちの熱い視線も気になる。八尋に邪(よこしま)な目を向けている男も少なからず存在していた。

「前途多難の予感……」

八尋はフウッと大きな溜め息を漏らした。

本文 p52～55 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>